

「椿」

飯野文彦

「まあ、いやだわ、真ッ紅なのね……」

「そんなこと知らないわ。赤いんだって白いんだって、散る時が来れア散るでしようさ。真ッ紅ならどうだって言うのよ」

里見弴「椿」より

柱時計が、ボンと鳴った。ポリリュームを絞って流していたラジオが、放送の終わりを告げる。ふだんは明け方までつづく放送も、日曜の深夜はもうない。

スイッチを切った。辺りの家々はすでに寝しずまったか、澄ました耳に靴音ひとつ響いてこない。

1 六畳の和室に並べて敷いた布団の片方で、うつ伏せになりながら、奈緒美は手にしたポラロイド写真を見つめた。左側に敷いた、もう一つの布団は、無人のままだ。

叔母が帰ってこない一人の家で、じっとしていられず、厭な胸騒ぎを感じながら、家捜しした。結果、新たに鏡台の引き出しの奥に隠してあるのを見つけた、一枚のポラロイド写真だった。

十月になったとはいえ、夢中で探しまわったため、汗を掻き、一時間ちよつと前、ガス風呂を沸かし直したほどである。

新し物好きの叔母は、発売されたばかりのポラロイドカメラを買って、子供のようにはしゃいでいた。

—— エスエックス70って言って、オートフォーカスもついてるのよ。これで奈緒美ちゃんの成人式、いっぱい、撮ってあげるから。短大の卒業式だって。それに……。

それに？ 何を撮ってくれるの？

奈緒美の問いに、叔母は曖昧に笑っていたものだ。それなのに。

「汚らしい」

力任せにポラロイド写真を破る。細かな紙片となっても止めない。

ふいに玄関の鍵が開く音がした。

足音を忍ばせて、歩いてきたのだ。そうでなければ、辺りの静けさの中、もっと早く気づいていたはずだ。玄関を開ける音だって、これほど神経が張りつめていなければ気づかないほど、遠慮がちである。

奈緒美は掛け布団をはねのけて、玄関へ走った。奈緒美を見て、一瞬、表情を固くした叔母だったが、すぐに唇をほころばせる。

「まだ起きてたの」

「寝られるはずないでしょ。こんなに遅くなるなんて、何も言わなかったし、電話ひとつくれないんだから」

奈緒美は裸足のまま三和土に飛び降り、叔母に抱きついた。

「どうしたの？」

「いじわる」

「汗臭いわよ。お湯は残ってる？」

叔母の胸もとから、汗臭いどころか、石鹸の匂いがした。

「残ってるけど」

「やっぱり、あの男と……」。

叔母はAという男と付き合っている。叔母の勤める理髪店に客としてやってきて、知

4
り合ったという。

奈緒美も、何度か、会ったことがある。

叔母を追って、奈緒美も浴室へ向かった。脱衣場で、寝間着と下着を荒々しく脱ぎ捨てて、浴室の扉を開ける。

全裸の叔母は、流し場のタイルに片膝をつくかっこうで、洗面器にすくったお湯を、肩からかけている。奈緒美は背後から抱きつき、叔母の背中に頬をすり寄せた。自然と啜り泣きがこぼれる。

「見たんでしょ？」

叔母がつぶやいた。

「何を？」

「写真」

奈緒美のところに、一枚のポラロイド写真が思い浮かぶ。

先ほど破ったものではない。数日前、叔母の留守中に叔母の部屋を掃除をしたとき、床に一枚のポラロイド写真が落ちていた。裸で抱き合う男女が写っていた。男の顔は写

っていなかったけれど、女は間違いなく叔母だった。

その後、奈緒美は掃除もそこそこ、家捜しをはじめた。

叔母が使っている戸棚の奥に、ポラロイド写真の束が隠してあった。男の顔が写っているものもあった。まちがいにAだった。

すべての写真を、奈緒美は破き、捨ててしまった。

「あんな汚らしい」

「戸棚にしまっておいたのまで、捨てなくてもいいじゃない」

「いやいやいや。あんなもの、ここに置いてあるだけで、汚らしいもの」

奈緒美は叔母の前に回り、抱きつき、口づけした。舌をむさぼり、タイルの上で転げ回り、奈緒美の手が、叔母の股間に触れた。

「剃らせて」

奈緒美は上半身を起こした。

「だめよ、もう」

「いいえ、剃るわ」

前みたいに、二人だけの秘密をもちたい。そうすればAとは、少しの間かもしれない

6 けれども、それでもしばらくは、叔母を取り戻せる。

奈緒美は、洗面器にお湯を入れ、石鹸と剃刀に手を伸ばす。家庭用ではなく、叔母が職場で使っている理容師用の、大型の剃刀だった。

「それなら、先に、あなたのを剃らせて」

叔母は、奈緒美の手から、剃刀を奪った。

「そんな」

「いやなの？」

「いや、じゃないけど」

「高校の、二つ先輩だったんですって」

「日記を見たのね。ひどい、プライバシーの侵害よ」

「あなただって、勝手に人の部屋をさぐるくせに」

「それ、と、これ、とは……」

叔母は、言葉を止めた奈緒美を、あざ笑うに似た口ぶりで、

「わからなかった？ わざと落としておいた写真に写っている男が、誰だか」

「まさか——」

てつきりAとばかり思っていた。しかし、言われてみれば、肌には張りがあった。

Aよりずっと若く、締まった胸と腹の筋肉が、奈緒美のなかで、微妙にからみあう。
「大学を卒業したら、あなたと結婚するつもりだって。そのくせ、ちよつと誘惑したら、あの始末」

「ひどい」

「それでも結婚するつもり？」

「そんな気、はじめからなかったわ」

「うそ。こうするのだって、久しぶり」

叔母は、奈緒美の股間に石鹼を泡立て、剃刀を動かす。硬い音が浴室の中に響いた。

「あたし、一生結婚なんてしません。ずっとおば様と」

「わたしだって、あなたのことは好き。でも、わたしはAさんといっしょになる。今日、プロポーズされたの」
やっぱり。

「あたしより、Aさんのほうがいいの？」

叔母は答えない。

「それなら、あたしもいっしょに住みます」

「彼も、同じことを言った。『あの子もいっしょに暮らせばいい』って」

「それならいっしょに……」

「だめよ」叔母は、語調を鋭く、尖らせる。「あなた、若いし、きれいだから」

「あたし、あの人、嫌いです。あんないいかげんな……」

「やっぱり」

しまった。日記にはぼかして書いておいたが、勘づかれたのか。まさかAが、言うはずもないだろうが。

「いっしょにいたら、またくりかえすに決まってる。だから——」

痛みより、違和感？

奈緒美は自分の股間を見た。タイルに赤く流れるものが。生理は、まだなはずだ。

「叔母さん！」

叔母は身体を起こし、奈緒美の首へ剃刀を当てた。その顔は般若の面をつけているのか。

唸りとも悲鳴ともつかない。喉を鳴らしながら、叔母は剃刀を深く深く、何度も何度も動かす。両眼から、大粒の涙がこぼれている。

「好きだったのよ。ずっと……ずっと……」

切り取った肉片を口に運び、愛おしさと憎しみを渦巻かせながら咀嚼する。

「でも——」

瞳に剃刀に負けない光が宿る。さらに手を動かしつつづけ、やがて。

バサッ。

椿の大輪が一つ、ぽっくりと散った。